

20代の独身時代。新田次郎等の山岳小説を読んで、その都度、自分も一緒に山に行った気分になっていた。

ある日、「風雪のビバーク」という本を読み始めた。冬の槍ヶ岳を目指す山岳行に、いつものように引き込まれていった。やがて、私の目に映る文字は、歪んで読めなくなった。手でぬぐいながら読み進めた。著者は遭難し、文字が書けなくなるまで遺書を書いていた。

数年後、山登りが趣味の友人に頼んで、夏の槍ヶ岳に連れて行ってもらった。天気も良く、最高の夏山だった。山頂付近の岩に、北鎌尾根へのルートを記す白いペンキの矢印があった。その矢印の先を覗くと道などなかった。視界には、垂直に切り立った崖と恐ろしくやせ細った尾根が小さく見えるだけであった。厳冬の北鎌尾根のやせ細った尾根で、雪と強風にあおられながらうずくまっている40年前の著者らの姿を想像していた。とんでもないところだ——私は言葉が出なかった。